

Disraeli のなかの「ユダヤ人」

— *The Wondrous Tale of Alroy* 論 —

小 西 真 弓

序

Benjamin Disraeli の文学作品を語る時、彼のユダヤ的局面を無視することはできない。無論 12 才で洗礼を受け、後にキリスト教徒を妻にした彼は、宗教的な意味では「ユダヤ人」ではない。民族性にこだわらない限り、彼はヴィクトリア朝の選挙法改正や帝国主義に貢献した偉大な「イギリス人」であった。しかし、彼が政界で活躍し始めた 19 世紀前半のイギリスにおいては、ユダヤ人は市民権こそ与えられたものの、社会的な人種差別から完全に解放されてはいなかった。¹⁾ 当時のイギリス人一般にとって、ユダヤ人はキリスト教に改宗して国会議員になっても、あくまでも「他者」だったように思われる。Disraeli のユダヤ的風貌をことさら強調する *Punch* の挿し絵や人種的偏見に基づく様々な批判は、彼に対する否定的なイメージを読者に抱かせたようであるが、²⁾ それらによって Disraeli は自らの民族意識を刺激されたのではないだろうか。民族性を誇示する彼の装いやマナーは、反セム主義にあくまでも対抗しようとした反骨精神の表れに他ならない。それは彼の文学作品についても同様

で、Disraeli はユダヤ主義を自らが創作した様々な物語の登場人物を通して語り、当時の文学界に大きな波紋を投げかけた。中でもユダヤ人のナショナリズムをテーマにした *The Wondrous Tale of Alroy* (1833 年) は、著者のユダヤ的色彩が最もよく反映されている注目すべき作品である。

I

Disraeli は *Alroy* を執筆した動機について「〔彼の〕血縁と家名の源である神聖でロマンチックな、かの民族の年代記の中の一つの華麗な出来事を祝福する目的があった」³⁾ と述べている。ここで「一つの華麗な出来事」と指摘されるのは、12 世紀半ばにアゼルバイジャン地方でユダヤ人が、セルジューク・トルコの支配に反旗を翻した事件である。このエピソードに関する歴史資料はごく僅かであるが、1160 年にアマディア生まれの David Alroi (本名, Menahem ben Solomon al-Ruhi) なる人物が、イスラム教徒の支配から逃れてイェルサレムに復帰しようと山岳地方の同胞に呼びかけて反乱を企てたが、カリ

* テキストには、Benjamin Disraeli, *Alroy or the Prince of the Captivity: A Wondrous Tale* (London: M. Walter Dunne, 1904) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

1) イギリスにおいては、1858 年まで法律によって議席に着くのに真のキリスト教徒の誓いをするように定められていたため、ユダヤ教徒は選挙区から選ばれても実際には国会議員になれなかった。

Montagu F. Modder, *The Jew in the Literature of England* (New York: Meridian Books, 1960), 161-66 参照。

2) A. A. Naman は *Punch* が Disraeli のユダヤ性を風刺するあまり、読者に彼に対する否定的なイメージを抱かせがちであったことを指摘している。

A. A. Naman, *The Jew in the Victorian Novel* (New York: AMS, 1980), 50.

3) William F. Monypenny and George E. Buckle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*, 2 vols. (New York: Russell, 1968), I, 194 からの引用。

フの指示に従った義父によって暗殺されてしまったと言う。⁴⁾ そんなあつけない幕切れにもかかわらず、ユダヤ民族のメサイアたらんとした Menahem の生涯は、幼少の Disraeli を感動させ、後にイェルサレムを訪れた 29 歳の彼の心にその記憶が蘇って、Alroy が誕生したとのことである：

イェルサレムに 1831 年に滞在して、イスラエルの王達の墓を訪れた時、私は少年に過ぎなかった自分の心を引き付けた、ある人物の生涯のことを思い出した…。そして Alroy の名を記念するための物語に取りかかった。⁵⁾

歴史上の人物である「Alroy の名を記念するために」とは言うものの、Disraeli はその単なるメサイア願望に取り付かれたと言われる Menahem のイメージに様々な潤色を加えている。物語の主人公、David Alroy は Menahem のように親族の手にかかって非業の最期を遂げることもなく、一時的にせよユダヤ民族の独立を実現する。なるほど彼が先導した反乱は、イェルサレムを奪回するまでには至らなかった。しかし彼の「神聖でロマンチックな」人となりを考慮すると Alroy は、William Monypenny が指摘するように、⁶⁾ Menahem ではなくマカベア家の Judas に喩えられるほどスケールの大きな人物として描かれている。ことに David 王の直系という血筋は、Alroy が同胞の支援を受けてセルジューク・トルコの支配に対して謀反を起こす経緯を考察する上で重要な意味をもつ。だが、主人公の性格付けに関しては、Alroy が神がかり的なユダヤ民族の英雄であると共に、人間が本来もつ世俗的な感情を備えた人物としても描かれていることに注目すべきであろう。

II

David Alroy は David 王直系の王子でありながら、セルジューク・トルコの支配するハマダンにおいて、叔父の Bosteny や妹の Miriam と共にカリフに貢ぎ物を捧げて居住を認められた存在に過ぎない。無論ユダヤ民族の中でも高貴な生まれの彼にとって、神の約束を受け継がぬイスラム教徒に貢ぎ服従するのは自らを「幽囚の王子」と認めることであり、屈辱に他ならなかった。

Alroy のユダヤ主義は、物語の第 1 章からハマダンの総督の Alschiroch が Mordecai と Esther の墓地を近道のために通過するのを、彼が拒否するエピソードから理解される。選民としてのプライドの高い彼は、総督と言えども異教徒が一族の憩いの場である墓地に足を踏み入れることに我慢ができず、Alschiroch の開門の命令を無視する。Alroy にとってそこは、どんな報復を受けても守るべきの聖地のように思われた。しかしユダヤ人をただの隷属民族とみなすトルコの支配者は、自分の命令に従わない彼を威嚇した後に馬ごと門を跨ぎ越して墓地を通り過ぎる。傲慢な Alschiroch の後ろ姿に Alroy は言いようのない憤りを感じ、異教徒に卑下される自分の存在を虚しく思う。彼がカリフへの年貢を納める祭りを敬遠したり、族長の地位を受け継ぐのを断るのも、叔父が誇る一族の経済的繁栄には何の意義も見い出せず、カリフの命令に従う族長の地位は「奴隷の筆頭」に過ぎないように思われたからであった。

甥の心中を察する Bosteny は、彼にメサイア願望を捨てて、寡婦や孤児になった同胞の福祉に貢献するように忠告する。しかし Alroy にはいかに一族の安泰のためとはいえず、叔父のように現実主義的に生きることは

4) Menahem の事件に関しては、H. Graetz, *Popular History of The Jews*, A. B. Rhine (New York: Hebrew Publishing Company, 1919), 254; *Encyclopaedia Judaica*, ed. Cecil Roth (New York: Macmillan, 1971), II, 750-51 を参考にした。

5) Modder, 193 からの引用

6) Monypenny and Buckle, I, 198.

できなかつた。異教徒に隷属するような夢のない生活を送ることは、死ぬことよりも苦痛にさえ感じられた。David 王の直系である彼の人生の目標はもっとロマンスに満ちていなくてはならない。彼は自らの存在意識を問いつつながら、心の奥底に潜む壮大な夢の実現を願う：

「ああ！私の心は憂いで一杯で、魂は悲しみで暗い。自分は一体何なのか。これは一体どうしたことなんだろう... 私には自分が何を考えているのかわからない。でも自分の感じていることは狂気の沙汰だ。もし人生は私が度々夢見るものであって、夢がかたうかもしれないとあえて考えるなら、このように存在するのは生きることではない。息をすること、食べること、眠ること、目を覚ますこと。そしてまた息をして希望のない存在を感じる。もしこれが人生なら死んだ方がましだと秘かに心に抱くのはどうだろうか... 神よ、私に征服させるか、死なせて下さい。David 王のように征服させるか、さもなければ死なせて下さい、Saul のように、神よ！

(9-10)

このような Alroy の夢に関して、Daniel R. Schwartz は「*The Rise of Iskander* を除いてたった一つの Disraeli の歴史ロマンス〔*David Alroy*〕は、1830 年代の彼の立場と大望の乖離から生まれた」⁷⁾と述べている。確かに、異民族の支配下にあつて現実と夢との軋轢に苦しむ Alroy の描写には、被差別民族でありながらもイギリスの政界にデビューしようという「大望」に身を焼かれた Disraeli の姿が投影されている。Alschiroch から犬呼ばわりされた主人公が、精神の拠り所であるイエルサレムを一目見て奮起したいという叫びは、東方旅行に心身の蘇生を期待した Disraeli の声そのもののようと思われる。実際に「1830 年代の彼の立場」は、異邦人であるが故に中々その才能を周囲に認めてもらえず、文学界や政界でも非難や嘲笑の的になりがちな苦しい

ものであつた。彼に対する人種差別的な敵意は、Thackeray をはじめとする様々な文人や政治家が露にした。中でも政治論争で彼と対立したアイルランドの Daniel O'Connell の言葉、「ユダヤ人が神に選ばれた民だとしても、そのなかには不信者もいる。Disraeli はその後裔の一人に違いない。彼は〔イエスと共に〕十字架にかけられて死んだ悪党の性格をそのままそっくりもっている。あの盗賊は Disraeli という名だつたに違いない」⁸⁾は彼をひどく傷つけたようである。

Disraeli があらゆる差別や妨害にもめげずイギリスの政界入りをあきらめなかつたのは、彼に激しい政治的野心があつたばかりではなく、イギリスの国政に関する権利意識があつた故である。即ち、彼はキリスト教を生み出したのは彼の先祖であり、イギリスの法や風俗習慣もシナイ山から生まれたと確信していた。⁹⁾ そのために彼にはユダヤ人がイギリスを統治するのも理にかなうように思われた。そのような見解はイエルサレムを訪れて過去のユダヤ民族の栄光を思い起こした彼の心に復活したに違いない。イエルサレムで「その生涯のうちで最も愉快な一週間を過ごした」¹⁰⁾ という彼は、それまで患っていた頭痛から解放され活力を取り戻して帰国し、¹¹⁾ 翌年の 1832 年に初めて都市の代議士に立候補した。当時の彼にとって Alroy の夢の実現を描くことはいわば一種のカタルシスであつたのではないだろうか。

III

Disraeli がイエルサレムでインスピレーションを受けたように、Alroy が当地で神がかり的な力を得るきっかけとなつたの

7) Daniel R. Schwartz, *Disraeli's Fiction* (London: B & N Imports, 1979), 43.

8) André Maurois 著 安東次男訳『ディズレーリ伝』(東京創元社, 1960), 91 参照.

9) Benjamin Disraeli, *Tancred; or, the New Crusade*, 2 vols. (London: M. Walter Dunne, 1904), I, 125.

10) Maurois, 52 参照

11) Bronson Feldman, "The Imperial Dreams of Disraeli," *Psychoanalytic Review*, 54 (1996), 109-10.

は、彼が妹の Miriam を凌辱しようとした Alschiroch を撲殺した事件であった。この出来事は Alroy にとって David 少年が Goliath を倒したことに喩えられる英雄的な行為であり、彼の精神を心機一転させる。

Alschiroch を殺害した Alroy は罪の意識を感じなかったが、カリフの報復を恐れた Miriam にハマダンから姿を消すように懇願されてエルブルズ山中へ逃亡し、そこでかつての師でカバラ主義者の Jabaster に再会する。長年メサイアを待望してきた Jabaster は、David 王の子孫で「神から油を注がれた」と主張する Alroyこそユダヤ民族の解放者と信じ、彼に一族を引き連れてイエルサレムを復興するように説く。そのためにカバラの教え通り、同胞をイエルサレムへ導く力をもつ Solomon 王の王笏を探求するように勧める。Jabaster の神秘的な説に魅せられた Alroy は、砂漠で多くの困難に出会いながらもイエルサレムに辿り着き、そこで不思議な夢のお告げによってゲッセマネの洞窟に導かれ、遂に Solomon 王の亡霊から王笏を受け取る。以来彼は巡礼の道中で知り合った盗賊やユダヤ人の不満分子、セルジュク・トルコから寝返ったアラビア人等を味方にして、ペルシア北部からアゼルバイジャン地方の町を次々に征服する。そして当地のユダヤ人を解放し、ハマダンを首都とする「メディア・ペルシア王国」の誕生を宣言する。さらにシリアやバグダッドのスルタンが、カスピ海沿岸から兵士を補充した彼の軍隊によって倒されると、女預言者 Esther の「バビロンへ入るな」という託言を無視してバグダッドを征服し、ユダヤ民族の国家を樹立する。

このような史実にそぐわぬプロットの展開からは、M. F. Modder が指摘するように「Alroy の作者は、自覚があったかどうかかわからないが、同胞の愛国心を吸収していたので、読者がヘブライ民族の栄光を認識するの

を望んだ」¹²⁾ という印象を受ける。なるほど Disraeli はユダヤ民族国家の建設という問題に対して、生涯はつきりした意見を表明しなかったと言われる。¹³⁾ またシオニズム運動が高まったのは19世紀後半であることを考慮すると、Alroy 執筆当時の作者をシオニストと見なすことは時代錯誤に思われる。しかし「足かせのない王子になりたい」と叫び、同胞をイエルサレムに率いる幻想にふける主人公を描写するにあたって、作者は彼の立場に同情を禁じ得なかったのではないだろうか。またイギリスでカトリック教徒解放案が可決されたのが1829年であることを考慮すると、やはり Disraeli が Alroy を執筆した動機の一つは、19世紀のユダヤ教徒の解放に向けて読者に「ヘブライ民族の栄光を認識させる」ことであつたと言えよう。それはともかく、イギリスの政界において確固たる地位を築こうとした Disraeli 自身にとって、まず必要だったのは、イギリス人のユダヤ人観を是正することであつた。彼があえて Menahem の蜂起を潤色したのも、ヘブライ民族が人種的に世界の指導者にふさわしい選民であることを鼓吹するためであつたに違いない。実際に、Disraeli は理想的なユダヤ人観を、彼の自伝的小説から政治小説にいたる種々の著作に表明している。

IV

ユダヤ人と言えば、従来のイギリスの文学作品の中では、Barabas や Shylock の類型に属する守銭奴やキリスト教道徳の掟にそむく悪漢がその大半を占めていた。19世紀に至ってはさすがに、ユダヤ人はキリスト教徒の子供をさらって過ぎ越し祭の犠牲にするとか、井戸に毒を入れて疫病を流行させるといったような中世の人口に膾炙した偏見は消

12) Modder, 197.

13) Robert Blake, *Disraeli's Grand Tour: Benjamin Disraeli and the Holy Land, 1830-31* (London: Weidenfeld & N, 1982), 131-33 参照.

滅した。しかし小説の中には相変わらず貪欲の象徴のような高利貸しや古着屋のユダヤ人が何人も登場している。そのような文学上の慣習を意識してか、Disraeli は故意に従来のイメージとはかけ離れたユダヤ人を *Alroy* 以外の作品にも何人も描き出し、彼らを通してユダヤ人の卓越性を主張している。例えば、*Coningby* (1844年) や *Tancred* (1847年) に登場するスペイン系ユダヤ人、Sidonia はロンドンの金融界の実力者で、若い頃から世界各地を巡り「あらゆる人間の知識や現在通用している言語、あるいは死語、東西のあらゆる文学を究め尽くした」¹⁴⁾ 賢者として描かれている。彼はユダヤ教徒であるために「大学や学校から締め出され」、市民権も獲得できなかったが、イギリスの社交界では重要なメンバーであった。また *Coningsby* や *Tancred* のような理想主義的な貴族青年達からは、精神的な指導者として尊敬されている。イギリスの財界で活躍しながらも、参政権のない Sidonia は、1847年から1858年までユダヤ教徒であるが故にイギリスの議席に着くことを阻まれた Lionel Rothschild を連想させる。実際に Disraeli は自分自身ばかりではなく社会的なハンディキャップを背負ったユダヤ教徒のためにも政治家として最善を尽くした。¹⁵⁾ Sidonia が *Coningsby* に語る理想的なユダヤ人観は、正に同胞の社会的地位の向上を目指した作者自身の反セム主義に対する論駁であろう：

君はファラオ達や Nebuchadnezzar, ローマ帝国や封建時代の人々をうまく挫折させた民族を、イギリスの大学の上品ぶった代表による目立たない、ありきたりな迫害でひねりつぶせると思うのか。実際に、コーカ

サス人種の輪郭をした純潔のユダヤ民族を滅亡させることは不可能だ。それは人種学的事実、つまりエジプト人やアッシリアの王達、ローマ皇帝やキリスト教の異端審問者を狼狽させた自然の法則に過ぎない。どんな刑罰や肉体的な拷問も、優秀な人種を減ぼしたり、彼らを劣等人種に同化させるような効果はなかった... 今現在、何世紀も何十世紀を経て退化してもユダヤ精神はヨーロッパの出来事に大きな影響を及ぼしている。僕が言うのは、君達が今だに従っているユダヤ民族の法律や君達の心に浸透している彼らの文学のことではなく、生きたユダヤ人達の知性のことだ。¹⁶⁾

V

Alroy を取り巻くユダヤ人らは無論、悪党や守銭奴の類型ではなく、同胞の解放に何らかの貢献をする人物として描かれている。なるほど一口にユダヤ人とはいえ、各々の宗教観や生き方は様々で、同胞間の反目や裏切りもある。しかし彼らはいずれも自己の利益のみを貪ることなく、選民としてのアイデンティティを重んじる。そんな彼らの築いた民族国家が瞬く間に崩壊し、*Alroy* がマカベア家の Judas ほどの名声を残すことなく処刑されてしまう顛末には、彼らのユダヤ主義の矛盾や限界が関わっていることを見逃してはならない。*Alroy* の登場人物の性格に関する限り、作者はユダヤ人を理想的に描写するばかりではなく、その否定的な側面を無視してはいないように思われる。例えば、一族の族長である Bosteny は、神の加護を信じる敬虔なユダヤ教徒であると同時に金権主義者でもあった。*Alroy* と同様、彼にとってもユダヤ民族の過去の栄光は忘れ難く、異教徒の支配下におかれることは屈辱的である。かつて

14) Benjamin Disraeli, *Coningsby or The New Generation* (Oxford: Oxford UP, 1982), 180-90.

15) 例えば 1851年に Disraeli はロンドンのシティーから議会に選出されながら、ユダヤ教徒であるために議席に着けなかった Lionel Rothschild のために次のような演説をしている：

あなた方は子供たちにユダヤ人の歴史を教えられる。祭日には人々にユダヤの英雄の勲を読んでやられる。日曜ごとに、上天への賛歌を歌おうと思われたり、苦悩の慰藉を求めんとされるときには、あなた方はこういう感情の表現をユダヤの詩人の歌の中に尋ねられる... 私はキリスト教徒として、わが主であり救い主である方がその懐で生まれたもうたあの宗教に属する人々を排除するという、おそろしい責任を負うことはできないのです。

Maurois, 179-80からの引用。

16) Disraeli, *Coningsby*, 219.

は彼にもメサイア願望があり、一族の解放は若き日の彼の夢であった。しかし老境の身となった彼は、一族の「栄光の時代」はもはや取り戻せない過去とあきらめ、不本意な現実を受け入れて余生を過ごしつつあった。そんな彼には、カリフへの多大な貢ぎ物が、屈辱ではなく一族の繁栄の象徴に感じられるようにさえなる。今や彼の生きがいは、ユダヤ民族の経済力がトルコの支配者を圧倒することであった。金権主義的な Bosteny の価値観は、彼の次の言葉に表されている：

若い頃、〔Alroy〕の祖父が友人だった。その頃はわしにも幾分なりとも幻想があった。夢だ、夢だったんだ！ わしらは不運な時代に巡りあってしまったが、それでもなお繁栄している。わしは、サマルカンドの産物やインドのショールを担った金持ちの隊商が、ノアの方舟を前にした踊りを見るのとまったく同様だとは言わんが、今だに見るに値する素晴らしい光景だと感じるほど長生きをした。わしらの支配者は、あんなにいばっているが、わしらはしでやっていけるもんか。わしらは今でもだんだん金持ちになっておる。わしはあの傲慢なカリフがイスラエルよりも卑しい奴隷に成り下がるのを見るために生きてきた…

(5)

世俗的な側面をもつ Bosteny にとって、メサイア願望を捨てきれない Alroy は一族の破滅をもたらす危険な存在に思われた。しかし彼には David 王の直系のユダヤ王子を抹殺したり追放する意志はなく、お尋ね者となった甥の行く末が案じられた。なるほど彼は、セルジューク・トルコに反旗を翻した同胞に物質的な援助を提供せず、ただ情勢を見守る。しかし、妹を守るために Alroy がハマダンの総督を殺害した事件については、「自分でも同じことをしたかもしれない…彼は自分の義務を果たした」(112) という共感を抱く。また彼が信頼するカバラ主義者の Jabaster が Alroy の蜂起に加わった知らせは、カリフの人質となった Bosteny を勇気づけ、彼の往年のメサイア待望を復活させる。いかに金権主義に陥ったとは言え、結局彼の魂を蘇生するのはユダヤ信仰なのである。

そのような Bosteny とは異なり、Jabaster

の弟の Honain はユダヤ教を放棄して、バグダッドのカリフに仕える日和見主義者であった。ギリシアに学んだ彼にとっては、いかなる主義も宗教も異民族間に不和をもたらす狂気に過ぎず、自分に利益をもたらす周囲の人間関係が重要に思われる。そのために彼には自分自介の才覚によってカリフのお抱え医師兼商人としての地位を築くこともできれば、イスラム教徒から盗みの嫌疑をかけられたユダヤ人の Alroy を救ってイェルサレムへ旅立たせるのも自分の義務のように感じられる。Honain が逃亡中の Alroy の命を救ったのはユダヤ民族のメサイアを求めたからではなく、異教徒に迫害された同胞に対する忠義からであった。背教者ではあるものの、彼は Jabaster の弟子で野心に燃える Alroy に「抑えきれない親近感」を覚える。しかし彼にとって旧約聖書の民の歴史は「流血の年代記」であり、ユダヤ主義も「殺戮の別名」に喩えられる危険思想に思われた。それ故彼は、Alroy にメサイア願望を捨てて自分のように、選民としての能力を自らの人生のために使うように勧める。

私たちの間の共感は無傷だ。君には私が何者かわかるかね。人には知られてないがヘブライ人だ。君が頭首である。かの軽蔑や拒絶を被り迫害された民族の一人なんだ。私も自由と名誉を得たかった。今、自由と名誉は私のものだ。私は自分自身のためのメサイアとなった。私はよい時に、我々の向こうみずな主義を放棄したが、それを試しに使ってみた。Jabaster に私がいかに戦ったか聞いてごらん。若気のみがそんな無分別の言い訳だ。私はこの国を離れて、ギリシア人に交じって暮らし、勉強した。彼らの知識の総てとその技術のいくらかを身につけて、コンスタンチノーブルから帰ってきた。誰も私を知らなかった。彼らのターバンを纏ったが、私は Honain 卿だ。王子よ、僕の経験に倣って悲しみを減らせ。君の人格と能力なら、立派なイスラム教国の大臣になれるよ。頭からたわ言を掃き出せ。今の帝国の無秩序な状態なら、君は自分で、乳と蜜の流れる不毛の地よりずっと愉快な王国を切り取るこさえてできるかもしれない。私はその不毛の地を見た。自分の馬に草を食べさせられない岩だらけの荒野をね。

(71)

VI

Honain のアドバイスにもかかわらず、Alroy が巡礼を再会するのは、彼にとって「向こう見ずな」ユダヤ主義を放棄できないからである。しかしバグダッドを体験して以来、彼の関心はメサイア願望の実現と共に、イスラム教国を支配することにも向いていく。彼がバグダッドに戻るのは無論、当地のユダヤ人を解放するためである。しかしそれは同時に、Honain を通して出会ったカリフの娘 Schirene に当地の征服者として再会し、彼女と添い遂げたいからでもあった。

Solomon 王がファラオの娘を妻にした例を引き合い出す Alroy にとってイスラム教徒の王女との結婚は、バグダッドを平和に治める方策に思われた。そんな彼は、次第に排他的なユダヤ主義を退けるばかりか、Honain の勧めに従って征服した異教徒らとの共存を図るようになる。彼にはイスラム教徒でさえ宿敵ではなく、「彼の臣民の大多数でたいそう価値ある存在」にさえ思えてくる。それ故、彼はモスクで狼藉を働くユダヤ人兵士を死刑に値する謀反人とする一方で、Honain や自ら手にかけてハマダンの新総督の弟をも重臣に加え、あげくの果てには自らがバグダッドのカリフになることを宣言する。

Alroy がバグダッドを中心とする帝国の支配者になることは、伝統的なユダヤ主義に固執する臣下らの不信感を買った。中でも排他的なユダヤ主義者の Jabaster は「孤立を維持することが、ユダヤ民族の掟の偉大な目的かつ本質である」(185) という信念に基づき、「バグダッドのカリフになることはできるかもしれないが、そうなったらユダヤ人ではありえない」(185) と Alroy に説く。彼にとっては、ユダヤ教徒がイスラム教徒と祈祷や食事の席を共にすることは、全くのタブーであり、両者の共存共栄はあり得なかった。

そもそも Jabaster が Alroy と共に異教徒と戦ったのは、イエルサレムにユダヤ民族国家と神殿を再建して、「一族の簡素な風俗、古来からの習慣、神聖な信仰」を維持するという宗教的な動機からで、世俗的な報奨は彼の望むところではなかった。しかし Schirene に魂を奪われて「バグダッドを自らのシオンにしよう」(167) という Alroy にとって、Jabaster の理念は「役に立たない」夢物語にしか聞こえなくなる。そんな彼の新たな人生の目標はイスラエルという枠を越えた広大な領土の覇権を掌握することであった：

世界は僕のものだ。だったら僕は世界中のすばらしい戦利品を、夢ばかり見る聖職者らの退屈な伝統を実現して伝説を神聖にするために獲得しようか。彼はアジアを征服し、寺院を建てた... エホバの神は、我々があなたのために関所を置き、ヨルダンとレバノン間に全能の神の国境線を設定しなければならないほど、ちっぽけな神なのか... とにかく僕は確かに召命を受けた。Jabaster ではなく、神の下僕だ。僕に神への信仰を神の力のように普遍的なものにさせて下さい。神の祭壇がユダヤ以外の丘の上でくすぶるからといって一体、私の信仰のどこに聖職者があえて因縁をつけようとするのか。

(167)

Alroy の世俗的な征服欲に注目して、B. Feldman は「Alroy は作者の飽くことのない自己愛を露にしている…若い作家〔Disraeli〕は、彼の同胞の宗教的な救いではなく、Benjamin Disraeli の繁栄と立身出世、非ユダヤ教徒に交じって自らの帝国主義的な権威を拡大することが人生の目標だと告白している」¹⁷⁾ と述べている。なるほど彼が指摘するように、Disraeli 本人がキリスト教徒に改宗したことや、後にイギリスの植民地主義のためにインドへの道を切り開いたことを考慮すると、彼の「理想的な野心」¹⁸⁾ とは、異民族や宗教を越えた一大帝国の建設だったように思われる。しかしそんな作者の壮大な夢が投影されているように見える主人公の帝国建設

17) Feldman, 135.

18) Disraeli は Alroy に自らの「理想的な野心」を描き出したと述べている。Monypenny, 185 参照。

が、排他的なユダヤ主義者の謀反やイスラム教徒の反撃によって挫折する物語の顛末は何を意味するのだろうか。

Alroy が失敗する理由は、E. W. Said の言葉を借りれば、「オリエントの政治力学や、イギリスの支配体制のはりめぐらした利害関係の網の目について〔Disraeli〕があまりにも深く知りすぎていた」¹⁹⁾ ためでもある。なるほど近東の歴史に通じ、イギリスの政治家を目指した Disraeli にとって、いかに舞台が12世紀に設定されたフィクションの中とはいえ、ユダヤ民族の覇権によるオリエントの統一を実現させるのは憚られたに違いない。しかし Alroy の築いた帝国の瓦解に関しては、作者の政治的な配慮と共に、ユダヤ民族間の信仰をめぐる確執がその直接の引き金であることに注目すべきであろう。厳格なユダヤ主義と人間性との相剋が描写されている物語の後半は、作者の「飽くことのない自己愛」ではなくユダヤ信仰に対する矛盾した感情が反映されているように思われる。

Ⅶ

Alroy の破滅は、彼が Jabaster の反対を押し切ってイスラム教徒の Schirene を妻にしたことから始まる。世俗的な観点からは無論、Alexander 大王の政略結婚を連想させる彼とカリフの娘との結婚は、異民族を支配する帝国を建設するための得策に映る。しかし異教徒を妻にした Alroy はユダヤ信仰を遵守する臣下らの信頼や忠心を失う。中でもイェルサレムの神殿を再建する夢に取り付かれた Abidan や Jabaster にとって、同胞の先導者であるべき彼の背信行為は、彼らのナショナリズムに水をさすばかりではなく、一族の存亡にかかわる神への冒瀆に等しかった。思い余った Abidan は、Jabaster らを扇動して遂に謀反をおこすが、主君に背くこ

とを Scherirah がためらうという不測の事態もあって、反乱は鎮圧される。しかし間もなく、Alroy の領土はユダヤ民族の内乱に乗じたカラセネやルームのイスラム教徒らに侵略され、崩壊の道を辿る。

イスラム教徒の蜂起を報告された Alroy は、彼のもとに残った忠実な兵士らと共に何とか自らの覇権を守ろうと戦闘意欲に駆り立てられる。しかし同胞の士気を高めてくれる Jabaster や Esther は、もはや世に存在しなかった。そんな状況の変化を認識した Alroy は自分が、「完全な勝利を思い出して燃え立つ英雄というよりは、呪われてやけになった背教者であるような気がする」(24)。さらに瀕死の兵士から Jabaster の死の真相を知らされた彼は、その亡霊が自分にイスラエルの報復を宣告するのも、彼が「神を放棄してしまった」からだ、と、自らの背教を確信する。そればかりか Solomon 王の亡霊は出陣前の Alroy を訪れて彼から王笏を取り上げ、「神も〔Alroy〕を見捨てた」ことを暗示する。以来 Alroy は神の加護を期待できず、味方の兵士すら略奪目当ての「傭兵」と感じるようになってしまう。そんな彼が Jabaster の誘いに応じて出陣するのは、「押し寄せる運命の力が〔彼〕を前進させる。〔彼〕には行く手を定めることも舵をとることもできない」(251) からであった。方向感覚を失いながら彼は、カリフとしての地位を守るために異教徒との攻防戦に全力を尽くす。しかしバグダッドはイスラム側に寝返った Scherirah の部隊と Abidan を味方に加えた Alp Arslan の軍団によって攻略されてしまう。

Alroy の結婚問題をきっかけに起こった一連の事件は、排他的なユダヤ教徒と異端的なユダヤ人の反目がシオニズムにとっても障壁となることを示唆している。なるほど宗教的にはイギリスに同化しようとした Disraeli の共感は、Jabaster ではなく異教徒に寛容な Honain や Alroy の側にあるように思われ

19) Edward W. Said 著 今沢紀子訳『オリエンタリズム 下』(東京:平凡社, 1993), 419.

る。世俗的な観点からは、ユダヤ民族の純血やイエリサレルへの復帰のためには、「アマレク人のようにイスラム教徒を絶滅させかねない」Jabaster の排他的なユダヤ主義は狂信に感じられる。しかし信仰を失った主人公が味方に裏切られ覇気を失ってしまうのは、Alroy には Honain のようにユダヤ主義にまったく背を向けることができないことを物語っている。確かに傍目からは、Schirene が Honain と共謀して Jabaster を暗殺したことを知りつつ、彼女との愛欲に溺れる彼は、世俗的な感情を信仰に優先させる背教者に映る。ところが彼は Jabaster の亡霊にイスラエルからの報復を宣告されて以来、彼はユダヤ教徒を裏切った背信感に悩まされる。結局 Alroy が英雄としての生涯を全うするためには、ユダヤ主義か Schirene への愛を貫くかは二者択一の問題であり、彼は死に直面してその選択を迫られる。

VIII

バクダッドをイスラム軍に占領された Alroy は、Schirene と少数の臣下と共に逃亡中に敵の小部隊に捕らえられ、地下牢の中で極刑を待つ身となる。そこへ新たなカリフに取り入った Honain が訪れ、彼が Alroy の命を取り止めるために Arslan にもちかけて成立させた協定を承諾するように勧める。それはユダヤ教徒の活躍によって損なわれたイスラム教の威信を、Alroy が神の使徒ではなく魔術師であることを認めることによって回復する代わりに、彼を助命するという協定であった。なるほどカリフの娘を奪ったのもイスラム教の領土を征服したのもユダヤの神の力ではなく、魔術であることが証明されれば新たなカリフがバクダッドを安泰に治めるのに好都合であった。そんなたわいもない作り話によって囚われの身となった一族の命も保障されるなら Alroy にとっても、その協定は何とか受け入れられそうに思われる。しかし

彼の神がかり的な力を否定するためには、最終的に本人が聴衆の前でユダヤ教の放棄を宣誓しなくてはならなかった。Honain にとってそんな誓いは、ただの「形式」、あるいはうその方便に過ぎなかった。ところが Alroy は Honain の期待に反して断固としてその協定を拒否する。いかに自分が神意に反する愚行を犯したとはいえ、Alroy にとって公然とユダヤ教を拒否することは、それがたとえ演技であるにしても「自分が最も邪悪な者より邪悪になり、最も卑しい者よりも卑しくなるのを証明することであった」(274)。それこそ彼には神への最大の冒瀆に思われた。

Honain に代わって Schirene は Alroy の恋愛感情に訴えて彼に背教の宣誓を承諾させようとする。なるほど彼は彼女から愛を囁かれると「別人になる」ような気もすれば、明日に迫った審判にも動揺する。しかしそこへ現われた Jabaster の亡霊を目撃した彼は、Honain や Schirene を彼の恩師の暗殺者として非難して二人を追い払う。すると彼に Jabaster の亡霊は、「神は地下牢が暗くても汝の忠誠に心を留められた」(286) という託言を残して消える。その言葉によって「神が自分を許した」(286) ことを確信した Alroy は翌朝彼を悪魔、Eblis の子として裁こうとする法廷に引き出される。そこでは彼の神業が魔術によって達成されたことを彼に認めさせようと野蛮な刑具が見せびらかされたり、Schirene をはじめとする証人が彼について様々な偽証をする。しかし彼はいかなる裏切りや威嚇にも動ずることもなく、あくまでも「世界を創造した自らの神の直接の命令によってイスラム教徒の支配に反旗を翻した」(293-94) ことを主張する。そればかりか彼は何とか彼を妥協させようとする Arslan を嘲笑う。彼の態度に激怒した Arslan は、判決を待ちきれずに自らの刀で Alroy の首を落とす。

おわりに

Alroy の殉教に関して Feldman は、「〔Disraeli〕は帝国主義的な権威の拡大の報酬としてユダヤ人としての殉教ではなく、背教の恥辱を喜んで受け入れた…しかし彼は心情的にはその肌と同様、ユダヤ人である」²⁰⁾と批評している。確かに異民族支配を目指した主人公の信仰復帰を讃えるような物語のエピローグは、作者自身の宗教性の矛盾を感じさせる。キリスト教徒の観点からは、それは Disraeli の内面のユダヤ性の顕現に思われるのであろう。しかし祖国なき民族の改宗を「恥辱」とする Feldman の言葉には、正にユダヤ人を「他者」扱いする差別感情が含蓄されているのではないだろうか。イギリスに生まれ育った彼にとって洗礼を受けることは、「恥辱」ではなく、むしろ当然の成り行きと言えよう。

Disraeli を「ユダヤ人」と称するなら彼の宗教性よりも、Maurois が指摘するように「現世の幸福を望むとともにその虚しさを悟っている」²¹⁾といったような東方的な性格を考慮すべきである。信仰をあえて問題にすれば、彼は旧約聖書と新約聖書の間を往来して両者を取りもとうとした人物であろうか。しかし彼にはマラキ書とマタイ伝の間隔があまりにも広すぎるという自覚があった。²²⁾ それ故に Disraeli はその隙間を跳びこえられない Alroy のような東方の同胞に対しても、哀悼の意を Miriam に代弁させたのであろう：

あなたはイスラエルのために偉大な業績を達成した。近頃、あなたのように立ち上がった者は一人もいない。もしあなたが負けてしまったなら、それはあなたが若くて、妙な具合に誘惑されてしまったからだ…

あなたは私たちに何ができるのか、そして何をするだろうかを見せてくれた。あなたの思い出だけがインスピレーションになる…いつか遠い将来に、私たちの神聖な血が血管の中に流れていて、国家というテ-

マに想像を掻き立てられる詩人が多分、Alroy の猛々しい生涯を彼の豎琴で弾いて、あまりに長く忘れられていた名を清めてくれるかもしれない。

(286-87)

無論、国家というテーマに想像を掻きたてられて Alroy の名を清めたのは、19 世紀のイギリスにおいて「立ち上がった」彼の同胞、Disraeli である。

20) Feldman, 135.

21) Maurois, 178.

22) Disraeli, *Tancred*, II, 119 参照.